

伝  
統

染

織

新紀行

16

古代染色のロマンを  
奏でる“海の紫”上

# 貝紫の染工房を開業した 伊賀上野の稲岡良彦さん

富山弘基



1. 巻貝アカニシのパープル腺を容器に集めたところ。黄色を呈しているのは貝から取りたてを証明している（写真A、B、C、D参照）



2. 貝紫を染める絹糸を前処理する（染色を安定させるために）



3. 写真1のパープル腺にアルカリ剤を入れ色素を溶かしているところ



4. 染色が可能な状態の染液。藍の花に似た貝紫の花がたっている



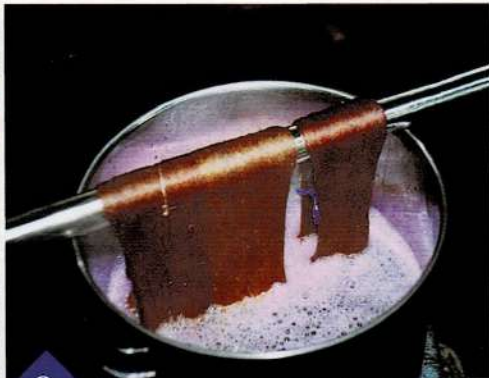
5. 貝紫染めをしているところ。還元（黄色）液から絹糸を引き上げ絞っている場面



6. 写真5の黄色を呈している絹糸は空気酸化で青色に変化する



7. 青色からさらに紫色に変化する



8. これも貝紫染め。絹糸が還元色の黄色から酸化が進むと紫色になる



9. 写真8の染め上がった貝紫の色



上野市にある雪景色の紫工房

## 紫工房〈貝紫染めの染色手順〉

染め人 稲岡良彦

毎日新聞（北九州版）。平成元年8月2日付夕刊で「鮮やか弥生の紫色」を報じる記事

吉野ヶ里遺跡の有柄細形銅剣に付着していた大麻布の光学顕微鏡写真。薄紫色が紫草染めの部分。右上のコバルトブルーは銅剣の鍍金が付着したものの



鮮やか  
弥生の紫色

吉野ヶ里出土の大麻布

弥生時代（約2500年前）の古布を染めた色は、鮮やかな紫色を帯びた。吉野ヶ里遺跡の弥生時代中期の遺跡から出土した大麻布は、その色合いが「鮮やか」な紫色を帯びた。これは、弥生時代の染色技術の進歩を示している。弥生時代の染色技術は、縄文時代から受け継がれてきたが、弥生時代には、より鮮やかな紫色を染める技術が開発された。これは、弥生時代の染色技術の進歩を示している。弥生時代の染色技術は、縄文時代から受け継がれてきたが、弥生時代には、より鮮やかな紫色を染める技術が開発された。これは、弥生時代の染色技術の進歩を示している。

ライフ

### 日本で最初の

### 貝紫染め請負工房

平成二二年秋、インターネットのホームページ「貝紫工房（伊賀上野）稲岡染色店」から発信する「貝紫染め」に思わず目を留め、アクセスした染織関係者は少なくなかったはずである。「吉野ヶ里遺跡から小さな布片が発掘されました。二千年の眠りを覚ました幻の古代染色の壮大な背景やロマンに、私の興味は尽きません。」

俳聖松尾芭蕉の生誕地で知られる三重県上野市は国内随一の組紐産地、ここで特産の組紐「伊賀高麗織」の糸染めを専業にする稲岡良彦さんが立ち上げたホームページ・リードの一文である。貝紫の染色技法の項目では、直接

法・還元法、小石丸絹糸の貝紫染めなどを紹介している。そして、よく見ると「サンプルが欲しい方、染色依頼」も受けると記されている。

今年二月迄に全国からアクセスのカウンタは一五二四件、ホームページを読んだ人たちは、アキガイ科の巻貝アカニシが染色の染料となり、実際に糸染めする工程をビジュアルに解説する三〇余齣の画像を凝視しながら、驚いたり頷いたり、感心したりと新たな知識を得たことになる。しかも、弥生時代の吉野ヶ里遺跡からこれまで日本の染色史上で皆無とされてきた貝紫染めの可能性を示唆する布片が発見されたことに重ね合せ、関心が寄せられたはずである。

染色の研究者と思われる人たちから

のサンプル請求や、商社から絹糸一キロの貝紫染めの依頼もあった。ホームページでは表だって発信者の意図は記していなかったが、稲岡さんの胸中ではこの時、日本で最初となる貝紫染めの下請工房、つまり藍染めにおける紺屋の役割を果す工房の開業をめざしていた。そのために五年余の月日を費やして、染色に適性のある巻貝、アカニシに原料をしほり、アカニシの剥身を包んでいる外套膜内にある、呼吸するための鰓と平行して走る鰓下腺（パール腺）で貯えている粘液から色素を抽出して染料をつくり、絹糸を還元法で染色する方法を繰り返しテストしてきた。

日常の仕事で行う化学染料による組紐用の絹糸染色とは全く対極にある天然染料の、なかでも特異な動物染料の貝紫による糸染めを、技術者としてやっとならした。

平成一三年八月の「月刊染織」二四五号に、稲岡さんは小さな広告スペースだったが、今度ははつきりと「貝紫染め加工」を明記して掲載した。「貝紫染め、洋の東西を問わず高貴な色、染色加工賃一〇グラム三千円、最少ロット一〇〇グラム。」

この広告に気付いた染織家は僅かだったがようである。気付いても、なぜ内陸部の上野市で？、貝紫の染料はどこから入手する？、その染色方法は確かなのかなど、広告の短い文面だけでは次々と疑問符がつく。なかには如何わしいと思った人もいただろう。

しかし、この単純で明解な広告の文面は軽い気持ちで書かれたものではなかった。昭和五八年一月の「月刊染織」三三二号の特集記事「貝紫「海の紫」



A. 採れたばかりのアカニシ、寸法はかなり大きい

B. 貝殻（アカニシ）のパープル腺のある部分を金槌で割る

の染色」を読んだ稲岡さんは「それまでまったく貝紫について知らなかったの、すごいと感動した」。それがいつかは挑戦したい夢の星となり、自身のライフワークと考えるようになった。それから雌伏一八年目にして、研鑽の成果を世に問う広告の一文であった。

### 古代フェニキア人が 興した貝紫染め産業

ここで稲岡さんが云う「貝紫染め、洋の東西を問わず高貴な色」について触れておこう。

貝紫染めの歴史は紀元前一四〇六世紀に、地中海沿岸の現在の地図ではレバノンの地域に古代フェニキア人の首都テュロスがあり、貝紫染め産業はフェニキア人の手によって始められたとされている。当時から「紫色」は王侯・貴族・高僧などの権力を象徴する高貴なもので、フェニキア紫は「ティリアン・パープル」の名称で知られているが、ティリアンはフェニキアの首都テュロスに因んでいると云われる。パープルは英語で紫を意味するが、古くはアレクサンダー大王、シーザー、クレオパトラなど歴史上に名だたる人物が、貝紫染めの衣を装うために莫大な費用を投じている。それゆえに、帝王紫、インペリアル・パープルとまで称えられたものが、西暦二三世紀には地中海に接する諸国から姿を消している。これには諸説はあるが、いっぽう中南米では、インデオの生活風習の中で今も伝承され、メキシコ・オハカ州の太平洋沿岸のドンルイス、タナバラなどの村落では、貝紫染めの作業が確認されている。日本からも天然染料の研

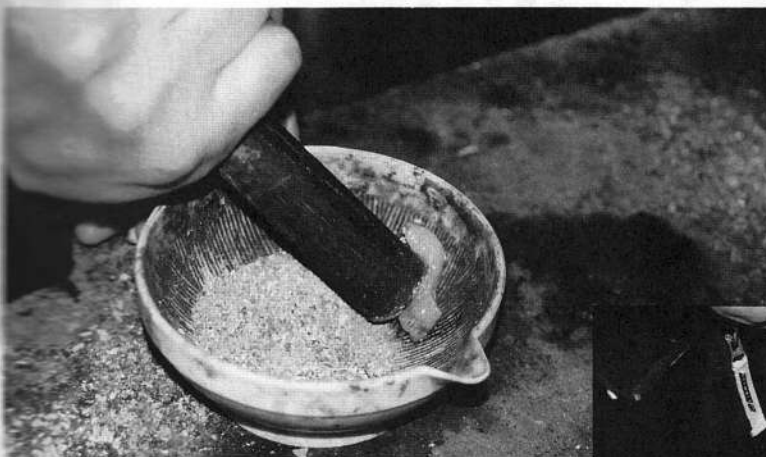
究者・吉岡常雄氏が、昭和四四年から数回現地に入り見聞し、貝紫のヒメサラレイシガイを採取している。

戦前の昭和一三年編纂の中島武太郎の『染色辞典』では、南米海岸で貝紫料を用いることを記載しているが、貝紫染めに関する邦文による文献では、明治一八年文部省編集局刊『商業博物誌』（一八七六年英国ロンドンで発行）の翻訳書が最初のもので染色書誌学者・後藤捷一氏は指摘しているが、同氏の貝紫への探求は深く、『染織』一〇六号（昭和一二年三月・染織文化社）から連載で記述する貝紫研究と各種刊行物で発表の一連の論考は二〇編にも及んでいる。その他の研究者の論考も多数にのぼるが、日本の染色の系譜に貝紫の存在を指摘するものはこれまで一編も見当たらない。また、志摩半島の海女たちが海中深く潜る際に、後針巻にして用いる磯手拭にイボニシのパープル腺で、魔除けの呪符印を描く古くからの風習は、布の模様染めの範ちゅうには加えられない民俗学的な研究対象とされているために、これを以って日本の貝紫染めとは認められることはなかった。

### 日本にも弥生期に 貝紫染めがあった

平成元年八月二日の新聞紙上に思いがけない見出しが踊った。「吉野ヶ里遺跡から「鮮やかな弥生の紫色」」。

佐賀県教育委員会では、昭和六一年から発掘調査を続けてきた神埼郡神埼町と三田川町にまたがる吉野ヶ里丘陵から、大環濠集落と墳墓群の発掘状況を同年二月に公表したばかりで、考古学研究に大きな衝撃を与えていた。こ



D. 取り出したパープル腺は搗鉢ですりつぶす



C. 貝の内臓からパープル腺（鰓下腺）を取り出す。肉質部は刺し身、酢のものにすれば美味である

の辺りの土壌から度々古代の器物が出土することはよく知られていたが、県の工業団地計画では吉野ヶ里丘陵一帯はその最有力候補地になっているた

め、急がれた発掘調査でもあった。「邪馬台国時代のググニ」と最大限の表現で報じられてからは、もはやこの地の工業団地計画は霧散、今日では国営吉野ヶ里遺跡歴史公園になっている。それに次ぐ八月二日の「弥生の紫色」を告げる報道記事は、墳丘墓の甕棺から出土の把頭飾付き有柄細形銅剣（紀元前一世紀半）の柄に近い部分に付着する、剣を巻いたとみられる絹布小片の織り目から、紫の色が確認されたとの内容だった。

織物研究家の小谷次男氏が光学顕微鏡で四ミリ角の布片を写真撮影して肉眼では見えなかった紫色を発見していた。これは当初は紫根染めと推定されたが、後に古代染色研究家・前田雨城氏がデンマテアル色材科学研究所の下山進所長の協力のもとに三次元蛍光スペクトルによる染料分析法で分析したところ、有明海に生息するアカニシ（アキ貝科）の内臓にあるパープル腺から分泌する色素の付着した貝紫染めと確認された。布の小片の微量な色素の発見は、紀元前後の古代の日本に貝紫染めがどのような方法であるにせよ、弥生人により行われていたことを伝える貴重な資料となった。

これに先立つ昭和五八年四月には「よみがえる高貴な色 帝王紫 吉岡常雄作品展」が東京など高島屋五店で開かれ、貝紫による手描き訪問着・染着尺・染帯を展示して反響を呼んでいた。同氏の指導のもとに西陣帯地メーカーの（株）じゅらくでは「じゅらく帝王紫」を発足させて商品化に取り組んだ。

また、同年九月には、知多半島のアカニシによる貝紫染めの訪問着と染帯

を、染色研究家の堀江勤之助氏が名古屋市内の昭和美術館で作品を発表した。この頃、綾の手袖工房の秋山真和氏は貝紫を手描き染めとは技術の異なる手法で絹糸を染め、これを織り込んだきもの作品で、この年の日本伝統工芸展に入選した。翌年「大和貝紫」と命名した。

さらに知多民俗資料館の浅井紀子氏も手織りで作品を、米沢の染織作家・諏訪好風氏は房総半島の富津海岸から採取したアカニシで絹糸を染めきものを織っていた。東京青山で呉服商を営む吉見逸明氏も貝紫に魅せられ商品化をめざしていた。琉球列島の石垣島では、昭和五年に深石隆司氏が貝紫糸を次いでムラサキイガイレイシガイで「琉球貝紫」の染め訪問着を山岡古都氏が、昭和五七年には巻貝の仲間貝殻は退化して扁平な、体長二〇センチ余の軟体動物・アメフラシ科のアメフラシの分泌紫汁で染める、片岡朴氏の「天草ムラサキ」や安田繕曠氏の「あめふらし貝紫」なども登場、昭和五七年から六〇年にかけて未知なる貝紫を染織作品に生かす試みが一挙に高まっていた。

昭和五九年三月には、名古屋工業研究所内で堀江勤之助・津田豊彦・日高佐吉ほか五名の「貝紫染総合講演会」が開かれるといったように、佐々木幸彌・日高佐吉・木村光雄・渡部忠重・相馬隆・寺田貴子ら各氏の貝紫染め研究論考と染織作家の制作する作品が出揃い、百花繚乱の観があった。（続く）

注1 貝紫工房のホームページのアドレス

<http://www2.ocn.ne.jp/~purple7/>